

# 難波西鶴と 海の道

【65】

森田 雅也

前回は、『好色五人女』

年16歳。十六夜の月も

悔しい、会って一言恨みだ

「貞享3(1686)年刊」

源五兵衛の庵へと忍んで

の主人公おまんの恋人、源

寂しい山里におびえながら

五兵衛の紹介でした。

分ける入りますが、庵は留守

源五兵衛は薩摩一の男前

でした。そこへ源五兵衛が

ですが、やめられないのが、

帰ってきます。しかも、言

男色の道。しかし、心か

い寄る美しい二人の若衆と

ら愛した相手に2度まで先

一緒に恋して、何通もの恋

立たれてしまいます。

一緒に恋して、何通もの恋

ついに、この世を捨て、

文を送っていました。でも、

恋を捨てて、まことの菩提

女色に興味のない彼からの

心から、片田舎の山かげに

返事はありませんでした。

草庵をむすび、後世のこと

それでも、おまんなは数々の

ばかり考える生活を送るよ

いに源五兵衛に会います。

なっています。

そのよつなとき、ある

人が、源五兵衛が出家した

ことをおまんに教えてくれ

ます。するとおまんなは、狂

烈に怒り、いつか時節を待

つてこの思いを遂げようと

思っていたのに、出家とは

悔しい、会って一言恨みだ

けでも言ってもやると、密か

に前髪姿の若衆となって、

源五兵衛の庵へと忍んで

行きます。

男装しても女のおまん。

寂しい山里におびえながら

分ける入りますが、庵は留守

でした。そこへ源五兵衛が

帰ってきます。しかも、言

い寄る美しい二人の若衆と

一緒に恋して、何通もの恋

## どうやってハッピーエンドに？

若衆の幽霊だったのです。

源五兵衛は、自ら訪れて

きてくれた現し身の美しい

若衆に感激。はや、口説い

てきます。何とも男色の道

に懲りない男です。

おまんを女と知らず、か

き口説いた源五兵衛でした

が、ことに及び、女性と

知ります。

このあたりが実にコミカ

ルに描かれているのです

が、ご紹介できないのが残

念です。鎌倉期の『とりか

へばや物語』に似ています

ね。源五兵衛はおまんの魅

力にぞっこんとなり、あっ

さりとも男色を放棄。めでた

く、おまんと結ばれ、所帯

を持ちます。しかし、収入

# 男色家、源五兵衛に恋するおまん

（関西学院大学文学部文

学言語学科教授）